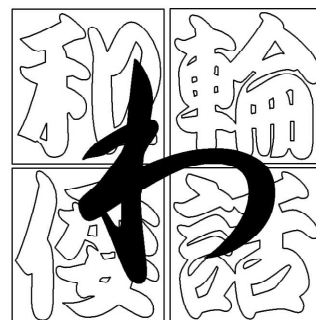


金沢区生涯学習“わ”の会

会報 第23号

平成19(2007)年11月



ホームページ: <http://wanokai.web.infoseek.co.jp/> メール: kanazawa_wanokai@infoseek.jp

“わ”の会の小旗、探訪でお目見え

目次

“わ”の会の旗

2 “わ”の会の小旗、探訪でお目見え

運営委員会からのお知らせ

3 特別公開講座開催のご案内

3 “わ”の会10周年記念事業の

アイデア募集!

6 “わ”の会蔵書・資料

学習会

4 学習会の感想(アンケート結果)

会員の寄稿

5 高嶺の花たち

(田中徳明)

7 宗像の大島を訪ねて

(林 洋)

9 浮雲俳句会・説教節

(菅井英夫)

11 金沢俳句 寺社めぐり (その2)

(北野清市)

12 中山道六十九次紀行 (その7)

(真田雅行)

行事予定

14 2008年2月までの予定

“わ”の会の旗

“わ”の会の小旗、探訪でお目見え

“わ”の会の活動も早10年。地域に着実に根を下ろして来たと思います。この活動を更に地域にアピールすることと探訪時の皆様の安全や仲間意識の向上の面から、“わ”の会の小旗を作ろうとの提案が「寺社を巡る会」代表の内田新二さんからあり、会報21号でお願いしましたように作成依頼先を探しておりました。

この度、またも内田さんから適切な依頼先(業者)のご紹介を頂き、念願の「会旗」を作成することに致しました。デザインの基本は会報1号(平成14年5月)からその表紙を飾っております“わ”の会マークと定め、具体的な価格や日程の交渉は内田さんと運営委員の小俣悦男さん、デザインは運営委員の小澤妙子さんの担当として作業を進めました。

業者との打合せが始まり、先ず地色を数種類の中から選択し、バックの「和、輪、倭、話」の漢字4文字が遠目からも引き立つように輪郭取りをしたり、横長の旗に合わせ四角いマス形をやや横長にしてバランス調整をするなど、小澤さんから細かくデザイン上の注文を出してもらいました。その他、価格や納期を含めて数回のやり取りを経て、思い通りのデザインの旗が短期間に低コストで出来上がりました。

この旗が10月19日の探訪「旧軍需工場ベルト地帯と今」で初お目見えしました。探訪当日は歩きながら旗の話が盛り上がり、「バランスや色合いも良いデザインだ」とか、「他にも旗をよく見かけるが、“わ”の会の旗はとても上品だ」等々、評判は上々でした。

「寺社を巡る会」も同じものを4本作りまし



デザイン担当の小澤さんと旗

たので、“わ”の会全体で10本の保有になります。探訪以外にも機会をみて使いたと思います。ご要望があれば必要に応じて貸出しも致しますので、運営委員会へお申し出下さい。

なお、このデザインは上記のように会報の表紙を飾っておりますが、最近では『かねざわの歴史事典』の表紙にも使われました。また、「寺社を巡る会」や「ふれあいの道歩こう会」の分科会が発行した冊子や“わ”の会ホームページにも使われており、まさに“わ”の会のロゴマークとなっています。



運営委員会からのお知らせ

特別公開講座開催のご案内

毎年実施しています特別公開講座を本年度も2月に開催致します。今回は、今年7月に講演を頂いた葛城峻氏のお話に対して大変にリ

クエストが多かったことから、同氏に再登板をお願いすることと致しました。テーマは未定で、追ってお知らせ致します。

＜特別公開講座実施要領＞

- ① 日 時：2008年2月16日（土）12：30～14：30
- ② 場 所：能見台地区センター 多目的室
- ③ テーマ：未定（追ってお知らせ致します）
- ④ 講 師：葛城 峻 氏
- ⑤ 参加者：“わ”の会会員 および 一般市民
- ⑥ 会 費：300円（“わ”の会会員） 400円（一般市民）
- ⑦ 申込み：第7回 学習会以降



“わ”の会 10周年記念事業のアイデア募集！

“わ”の会は2008年5月で10年目を迎えます。記念事業を2008年度の“わ”の会行事に組み込むためには、そろそろ具体的に計画をする必要があります。つきましては、まずは会員

の皆様からのアイデアを募集致します。式典やパーティのようなもの、事典の様に後々まで活用できるものなど、具体的なご提案を色々と下記宛にお願い申し上げます。

＜10周年記念事業アイデア宛先＞

- ① 郵 便：〒236-0051 金沢区富岡東5-4-25 岡本茂男
- ② 電話・FAX：045-771-4393（岡本）
- ③ 電子メール：kanazawa_wanokai@infoseek.jp
- ④ 締 切：2007年12月20日（第1次締切で、以後も随時受け付けます）

注：5周年では「5周年記念誌」と「かねざわの歴史事典」の編集・発行を行いました。

学習会の感想（アンケート結果）

第4回学習会「陰陽道と密教」

2007年8月11日 講師：県立金沢文庫 学芸課長 西岡 芳文 氏 出席者：78名（63%）



- 初耳で難しく、よく分からなかった。
- 難解な陰陽道が面白く楽しく聴け、何たるかが分かった。
- 陰陽道が想像以上にテクノロジーであったことを知った。
- ダキニ天とキツネ（稻荷）の関係が印象深い。
- ダキニ天と天皇、平清盛との関係が印象に残った。
- 神道は宗教ではなくテクノクラートだったこと。
- 密教についてもっと詳しく知りたい。

第5回学習会「大橋新太郎と金沢」

2007年9月8日 講師：郷土史研究家 酒井 宣子 氏 出席者：84名（68%）

- 大橋新太郎の金沢に対する貢献が素晴らしい。
- 講師の研究に裏付けされた確かな内容と豊富な知識。
- 講師の熱意のこもる講義が良かった。
- 大橋新太郎が金沢文庫復興支援時に永久維持の注文をつけたこと、雇用創出の提案をしたこと等が印象深い。
- 大橋新太郎の人物像や当時の別荘地周辺状況が良く分った。
- 大橋新太郎の成功物語や商才・超人ぶりは想像以上だった。
- 西武に譲渡された土地のことをもっと詳しく知りたい。



高嶺の花たち

田中 徳明

鴨越

関八州見晴台から吾野駅へ向う。針葉樹林の中の曲がりくねった簡易舗装の林道。「面白くない」と、右手に畑が現れ「吾野駅方面」の標識の立った草の畦道が見えた。さては近道と決め込んで、躊躇せずそのルートへ。が、これがとんでもない曲者。

鼻歌まじりに歩いて行くと、突然崖かと思まがう急傾斜の出現。後ろを振り返ると、彼女がストック無しで来ている。「私の使いますか」と声掛けたが、「いえ、大丈夫」との返事。そして、木の幹・枝で巧みにバランスをとりながら急坂を下ってくる。10分以上も下ったか。突然足の下に駅のホームが出現しまさに「鴨越の逆落とし」。

後日、彼女の感想。「あの鴨越、スリルがあって楽しめた」。参った。

手袋

紅葉の生藤山。天気晴朗。気分良く下り始めた。意外な落とし穴が待ち伏せしていた。

雨でえぐられた狭い山道の窪みが、厚く重なり積もった落ち葉で完全に覆い隠されている。何処に足を踏み込めば安全なのか不安になる。

急坂が来た。後ろの彼女を見た。いつも元気な人が、困った顔をしている。数秒の間があって、右手を差し出した。数秒の間があって、彼女の手がそれに掴まった。そのまま、そろりそろりと急坂を下った。

急坂が終るとすぐ手を離した。二人とも手袋をしていた。

下戸

担当幹事の粋な計らいで、長瀨の河原での反省会となった。缶ビールに乾き物などを買い込み、河原の大石に腰を下ろしてノドを鳴らす。夏の暑い日を歩いてきて、下戸で通っていた私も缶ビールに手を出した。「ああうまい」とつい声が出た。そのとき、「この裏切り者」と指弾の声。見ると彼女は、下戸の私のために甘味を用意してくれていたのだ。「あ、すみません。頂きます。頂きます」と私は低頭しつつ、甘味を肴にビールを飲んだ。

以後、固く禁酒の誓いを遵守した日を送っている。

和み

20人足らずのメンバーだが、隊列は長く伸びることが多い。いつも、しんがり近くに彼女の顔がある。隊列が急げば歩を速め、のろくなれば緩める。水の流れのように無理がない。そしていつも穏やかな和みのムードを醸し出している。

宝燈山神社の境内に、彼女のご尊父の句が刻まれた碑があった。残念ながら正確に記憶していないが、「初冬の原野、日矢を受けた凍蝶が天に舞う」と言うような透冷な句趣であったと思う。

ところでさて、彼女もまた父譲りの閨秀歌人であるかどうか。未だ、謎のままである。

土 蜂

榛名山コースの下り。丸太組の階段で、前を歩いていたグループが、何やら騒いでいる。丸太の下の土蜂の巣を踏んづけたため、怒り心頭に発した風な 2・30 匹の土蜂の群れが、狭い山道いっぱい狂ったように乱れ舞っていた。7・8 人が刺されたようだ。

道の端を用心しつつ歩いていると、いきなり首の右後ろにズキーンときた。「後ろからとは卑怯なり」と叫んだが間に合わない。他に、女性 2 人が刺された。土蜂と侮っていたが、痛みはなかなか治まらない。

休憩で腰を下ろしていると、「未だ痛みますか。薬塗っていいですか」と彼女。そして、白髪頭の首筋に、滑らかな心地よい感触。ずっと痛みは引いた。

ストレッチ

「お願いしますよ」と頭を下げる。「私ばかり嫌ですよ」と断られたことがない。スタート前に全員でするストレッチ。その指導は、各コースの担当幹事の役割だが、これがどうして誰でもうまく出来るとは限らない。私を含めズルする者もいる。そのとき、彼女の出番となる。

彼女のストレッチは、なかなかのもの。手足は勿論、首、肩、肘、膝、腰、足首、アキレス腱と全身に及ぶ。10 分足らずだが、終わると心身ともに軽くなって、「いざ、歩かん」の気分になる。

体育の専門家とは思えないが、彼女は心強い仲間。



“わ”の会蔵書・資料

会報 20 号(2007/2) 発刊後に“わ”の会で入手しました蔵書・資料の一覧です。貸し出し希望の会員は電話(045-771-4393 岡本)、または電

子メール(kanazawa_wanokai@infoseek.jp)でお知らせ下さい。

No	著者・編者	書 名 資 料 名	発行日	発行元	入手日 (入手法)
23	高橋秀和 他	山本煉瓦と帆掛け舟	2006.12	石井元吉	2007.3 (寄贈・発行元)
24	鶴見歴史の会 古文書研究部会	資料研究 関口東右衛門の「道中日記」	2006.12	鶴見歴史の会 古文書 研究部会	2007.3 (寄贈・発行元)
25	横浜郷土史団体 連絡協議会	横浜郷土史団体連絡 協議会会報 Vol. 1	2007.3.24	横浜郷土史団 体連絡協議会	2007.4 (配布)
26	神奈川宿遊学 セミナー/ 神奈川宿古文書 の会	【地域資料を読む 2】 神奈川宿往来 —神奈川宿本陣石井家 文書を中心として—	2006.11	横浜開港 資料館	2007.4 (寄贈・発行元)
27	神奈川宿古文書 の会	神奈川宿古文書の会会報 第 30 号	2006.10.28	神奈川宿 古文書の会	2007.4 (寄贈・発行元)

場の夢の小夜島を見る。この時は、大潮の干潮時だったので陸と続いていたが、明るく朝には潮が満ちて海に浮かんでいた。



夢の小夜島

宿には、政府登録観光旅館の看板が掛かっていたが、泊まり客は私1人。海の幸を堪能して、民宿みたいにゆっくりとくつろがせて貰った。

明るく日は荷物を宿に預けて、沖津宮遥拝所を經由してハイキングコースを大島灯台まで歩く。砲台跡、風車と牛の放牧場の中に作られた遊歩道を牛糞に注意して歩く。灯台までの2時間の道で、草刈の老人と1人のハイカーにしか会わなかった。

暑さに参りそうになって灯台に着く。この遊歩道は、ウルグアイ・ランド農業合意関連対策の予算で造られたとの看板が立っていた。警官がバイクでやって来て、灯台から崖下を覗いていた。多分、アワビの密漁者がいないか探していたのだろう。

灯台から島の外周道路を反時計回りに歩く。外周道路と言っても海岸に出るのは1個所だけで、ほとんどは、上り・下りする山道。津和瀬の海岸で昼食を取る。ここには「寛永20年ポルトガル人漂着」の看板と「アワビの密漁は犯罪」の大看板があった。対馬暖流に向きあった島の様子が窺える。

津和瀬から坂道を上がっていくと向こうか

ら来た車のおじさんが「大変だから渡船ターミナルまで送ってやる」と言ってくれた。お礼を言ってそのまま歩き続けたが、余程疲れている様に見えたのか。この島には親切な人が多い。

5時間弱歩きとおして、もう一度宗像大社中津宮へ。この宮の近くに天の川伝説発祥の地がある。御獄山を源とする清流の名が「天の川」で、右岸の丘の上に織姫神社が、左岸の丘の上



天の川

に牽牛神社が祀られている。

この後、宿で荷物を受け取って渡船ターミナルに向かう。旅客船「しおかぜ」、バス、JR九州と乗りついで2時間弱で小倉に着いた。

大島は、私の住んでいる団地と同じ程度の人口だが、支所、消防署、郵便局、喫茶店等もある集落で、アワビ漁等の漁業と田圃の農業で暮らしている。歩いているときに道路端の除草作業をする人達と宗像市役所のマーク付きの自動車をよく見掛けた。国の補助金を受けた公共事業や市役所の予算等で手厚く保護された暮らしやすい共同体なのだろう。

追記: 今回の探訪で撮影しました写真の全体を次のURLにカラーで掲載しました。

http://homepage2.nifty.com/WRFPM/picasa_1.html

浮雲俳句会・説経節

菅井 英夫

“わ”の会には2004年に入会し、3年たちました。現在、分科会には「浮雲俳句会」と「ふれあいの道歩こう会」(ビジター)に入会しております。

「照手姫説教ガイドに瀬戸の月」。本年9月「浮雲」句会投句(駄句)であります。俳句の説明は野暮の極致で非才を露呈するだけです。拙句は母校(水戸・高校)の同窓会を金澤で執り行った際、当地の案内をした時の情景を読んだものです。国道16線の新瀬戸橋脇に「姫小島水門跡」があり、説明文には「その昔照手姫がこの島にて松葉いぶしの難に遭いたるを土地の人が哀しみ呼んで姫小島と云う」とあります。この場所での句です。

姫小島由来は「小栗判官伝説」から出ています。相模川に流された照手姫がたどり着いた「ゆきとせが浦」は六浦であるという伝承があり、六浦(現・東朝比奈)の千光寺には、照手姫の守り本尊がまつられています。また、貞享2年(1685)編集の「新編鎌倉誌」には、瀬戸橋付近には照手姫が松葉でいぶされた松の木跡があり、姫の跡を追った照手の侍従が身を投げたのは「侍従川」である、との記述もあります。

この「小栗判官伝説」は数年前、市川猿之助のスーパー歌舞伎「オグリ」で復刻がなりました。

たが、もともとは中世日本の「説経節(せつきょうぶし)」の代表作です。室町時代には「小栗判官(おぐりはんがん)」「刈萱(かるかや)」「山椒太夫(さんしょうだゆう)」「しんとく丸」「愛護若(あたごわか)」のいわゆる五説経が現われます。

そのなかでも他を寄せつけないスケールの大きさを持つのが『小栗判官』です。筋は奇想天外・非常に長い物語なのですが、①スーパー・ヒーロー小栗「兼家」の成人までの冒険物語と常陸・小栗への追放(京都⇒常陸)、②照手姫物語(藤沢)、③小栗の照手求婚(常陸⇔相模)、④小栗の謀殺(藤沢)、照手追放(六浦)、⑤照手放浪受難物語(六浦⇒北陸道⇒大垣)、⑥死者(小栗)再生、餓鬼阿弥(ハンセン氏病のイメージ?)流浪物語(藤沢⇒熊野)、⑦小栗・照手再会、小栗復活(熊野⇒常陸)の7部門に分かれます。舞台は常陸・小栗から紀伊・熊野まで東海道・東山道・北陸道と広範囲にわたります。

「説経」とは、一遍が開基の時宗(踊念仏)の弟子達=「阿弥」や説経師が、遊行時に一般庶民に行ったパフォーマンスであったようで、室町期に大流行し、歌舞伎・浄瑠璃の原型との説もあります。「小栗伝説」の後半部分は、ハンディキャッパーの物語でもあり、平家物語の

演者も盲目の琵琶法師ですから、このような室町期の「大衆芸能」は障害者・被差別者の専管事項ではなかったかと唱える学説もあります。

「小栗伝説」は空想の産物ではなく、藤沢の長生院の伝承には「常陸国真壁郡の小栗（現・茨城県筑西市）に、小栗「満重」という大名あり。応永（1394 から 1427）の頃、関東公方の足利持氏に謀反の疑いをかけられ、鎌倉より討手を向けられ攻め落とさる。」とあります。史実は、小栗氏一族が上杉禅秀の乱（応永 23 年（1416））に禅秀方に味方し敗北、その後応永 28 年満重再挙兵。この乱は常陸・下野にまたがる大争乱となったようです。その後、応永 30 年、足利持氏により小栗城陥落、満重は自

殺、その子助重が一族の領地のある三河国に逃亡。その後、助重は結城合戦で戦功をあげ領地を復したが、康正元年（1455）再び落城し助重の消息は不明。

室町期の関東の歴史書は少なく、当時の状況判断は難解ですが、結城合戦頃から利根川をはさみ、後の古河公方方（常陸・下野・下総・上総・安房）と山内上杉関東管領方（上野・武蔵・相模）に東西真二つに割れ、150 年間程延々と「戦い」が続いた可能性があります。きっかけとなった小栗一族による騒乱は非常に大きな事件であり、一般庶民にも知れわたり、ゆえに説経節の代表作となったのかもしれませんが。

「かねざわの歴史事典」から

【金沢八景】 かねざわはっけい

こずみのやう せとのしゅうげつ のじまのせきしょう うちかわのぼせつ
小泉夜雨、瀬戸秋月、野島夕照、内川暮雪、
おつとものはん すさきのせいらん ひらかたのらくがん しょうみょうのぼんしょう
乙舳帰帆、洲崎晴嵐、平瀉落雁、称名晩鐘
をいう。金沢は古来景勝の地で、平安時代の巨勢金岡、藤原道長、鎌倉時代の藤原頼経などの来遊の伝承がある。金沢八景は能見堂からの眺望を心越禅師が元禄 7 年（1694）に漢詩に詠んだのが発端である。地形の変化で眺望の中心が瀬戸方面に移ったが、広重の浮世絵や種々の紀行案内書により、八景の情景も定着し、江戸からの遊覧も盛んになった。現代に入り地形が大きく変わり、称名晩鐘以外昔の面影は無い。

【金沢八名木】 かねざわのはちめいぼく

あおばのかえで せいこのうめ くるうめ さくらうめ もんじゅざくら ふげん
青葉楓、西湖梅、黒梅、桜梅、文殊桜、普賢
ぞうざくら じゃびやくしん すずめがうらのひとつまつ
象桜、蛇混柏、雀浦一つ松の 8 種である。江戸時代に金沢八景と共に有名になった。殆どの案内書に登場し、多くの絵図にも描かれている。最初の 6 種はいずれも称名寺境内にあったが、今は何代目かの青葉楓が残っているのみ。蛇混柏は瀬戸神社、雀浦一つ松は室ノ木にあったが現存しない。蛇混柏、雀浦一つ松や黒梅には異説があり、君ヶ崎の一葉松、瀬戸神社の三本杉、室ノ木の大樟木、金龍院の大楠木、能見堂の筆捨松などが挙げられたこともある。

金沢俳句 寺社めぐり (その2)

～分科会「寺社を巡る会」に参加して～ 北野 清市(一清)

第3回 テーマ「富岡の今昔」

H19年8月2日。晴れ時々曇り。10時、京急富岡駅集合。富岡六地藏・富岡八幡宮・長昌寺・富岡公園(昼食)・慶珊寺・宝珠院・持明院・悟心寺の順に廻る。昨日は例年より10日余り遅い梅雨明け。今日は台風が九州上陸とめまぐるしい天気が続く。

一湾の風吹き上ぐる夏の駅
赤とんぼエプロン似合ふ六地藏

おちこちに別荘跡や南風の街
雲の峰かつての海岸辿りけり
蟬時雨社をおほふ叢林に(富岡八幡宮)
里芋の葉生きいきと芋観音(長昌寺)
走り根を対面通行蟻の列(富岡公園)
住職は檀家めぐりや施餓鬼寺(慶珊寺)
熊蟬や山門の辻日陰なく(宝珠院)
在りし日は寺子屋なりし酔芙蓉(持明院)
盆前の閻魔十王睨みをり(悟心寺)

第4回 テーマ「初秋の能見堂周辺」

H19年9月13日。曇り。10時、京急文庫駅集合。谷津浅間神社・太寧寺・関ヶ谷不動尊・不動池(昼食)・能見堂跡・正法院・手子神社の順に探訪した。1週間前には台風9号が小田原へ上陸。本日へ順延となった。

平瀨の海へは半里赤とんぼ(谷津浅間神社2句)
「清方」の眠る街並曼珠沙華
柿ともる尼僧の法説太寧寺(太寧寺3句)
範頼の墓に手向けし彼岸花

鳴きたらず昼も鳴き居るちちろかな
野分あと倒木越えて不動尊(関ヶ谷不動尊)
秋天や鶯の輪落つる不動池
秋風や帰帆はるかに能見堂(能見堂跡2句)
遠き日の筆捨松や広重忌
秋の蚊のはたけどまとふ赤井かな
実椿や十六羅漢正法院
椽の実右に落つれば手子神社
(広重の「小泉の夜雨」を偲ぶ)
秋思いま「小泉の夜雨」の舵枕

第5回 テーマ「中秋の白山古道」

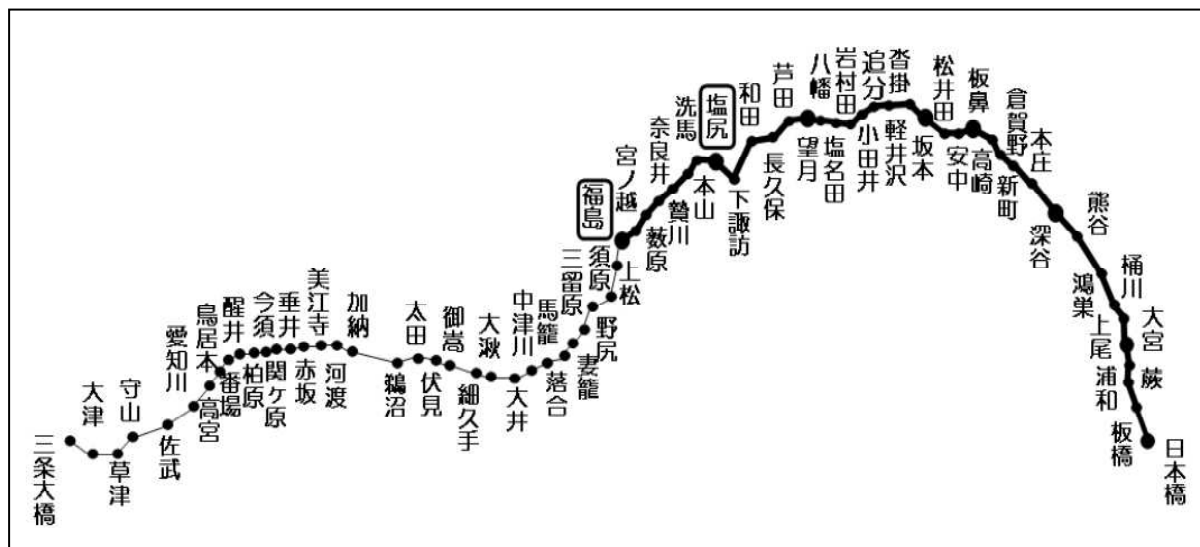
H19年10月4日。晴。10時、神明前バス停集合。金蔵院・満蔵院・禅林寺・自性院(昼食)・磨崖仏・東光禅寺の順に廻る。6日間も南岸に前線が停滞。雨や曇りのぐずついた天気連続であった。しかし、本日は一転“天高く馬肥える”秋晴れの絶好の吟行日和であった。

秋声を聴かんと空ろ木叩きけり(金蔵院2句)
秋高しマンション地藏十一体

句碑多き俳句の里や秋惜しむ
萩の寺極楽参道登りけり(満蔵院)
禅寺に雀飛び来る秋日和(禅林寺)
本堂の「菊の御紋」や菊日和(自性院)
秋天や白山道の史跡踏む(磨崖仏2句)
団楽の落つるわいづれ磨崖仏
秋気澄む「般若心経」唱へけり(東光禅寺2句)
天上の龍立ち上り秋天へ

中山道六十九次紀行（その7）

真田 雅行



<塩尻宿—洗馬宿—本山宿—贅川宿—奈良井宿—教原宿—宮ノ越宿—福島宿>

(46 km)

松本街道との分岐点だった「**塩尻宿**」を抜け、珍しく街道の両側に残る一里塚(但し塚上の木は松)を過ぎれば一面のぶどう畑で塩尻ワインの産地。ぶどうの香りが漂い、ワイナリーが数軒営業していた。しばらくすると縄文時代～平安時代に及ぶ大集落跡の「平出遺跡」が現れ、一部復元されていた。更に進むと日本最北限に出土したという銅鐸碑があり、一帯が古くから開けた地域だったことがわかる。

「**洗馬(せば)宿**」の名は木曾義仲とここで出会った家臣・今井兼平が義仲の馬を洗ったことに由来し、北国西街道(善光寺道)との分れ路であったが、昭和の大火で焼けてしまい面影はない。

次の「**本山宿**」は静かな山間の小さい宿で、屋号看板の家並みに宿場時代の面影が残り、正面を見ると、山々が目前にせまり道を塞いでいる感だ。

ここまでが松本藩領で木曾路の入口にあたるが、ここを有名にしているのが「そば切り」

の発祥地ということで、それ以前はそばの実を粒のまま食べていたという。このことは芭蕉の門人・森川許六が書き残しているからほぼ間違いないようだ。

やがて奈良井川の支流にかかる「境橋」を渡ると「是より南、木曾路」の石碑があって、ここから尾張藩領となり、いよいよ島崎藤村「夜明け前」の「木曾路はすべて山の中である」の木曾路に入る。

ただ木曾路は両側に山が迫っているために、三留野宿までは国道19号線やJRが旧道と重なったり並行したりで、宿場近辺以外は結構交通量と騒音が多く、歩行に注意が要る。

さて、木曾路十一宿の最初は「**贅川(にえかわ)宿**」。宿の入口の中央本線の脇に福島の間所に次ぐ重要な関所があって「入り鉄砲に出女」を取締まったほか、檜など木曾五木の搬出を取締った尾張藩番所が復元されている。特に木の伐採監視は厳しく、見つかって打首になった者もいたという。

やがて特産物の木曾漆器の町「平沢」に差掛かる。両側にビッシリ漆器店が並び、江戸時代の面影が残る静かな町だ。

道沿いの川は奈良井川で日本海側へと流れ、分水嶺はもう近くだ。遊歩道を更に進めば、やがて中山道の難所「鳥居峠」を控えて宿泊客で賑わった「**奈良井宿**」に至る。

ここは東海道五十三次の「関宿」同様、国指定の「伝統的町並み保存地区」に指定されて建物全部が古建築を利用し、旅籠「伊勢屋」や明治の文人幸田露伴・泉鏡花・正岡子規などがよく利用した旅籠「徳利屋」など江戸時代の雰囲気色が濃く漂い、あちこちに水飲み場もあって山中を感じさせる宿場だ。電柱は一本も見えない。

明日の峠越えに備えて、今日はここの旅籠で宿泊したが、宿のおかみ及び偶然同宿した外人夫婦との団欒と夕食が楽しかった。

奈良井宿は見所も多かったのも、翌朝再度200体もの地蔵がある八幡宮、杉並木、大宝寺のマリア地蔵等を巡り、宿の南はずれからいよいよ鳥居峠の登りにかかった。

峠（海拔 1197m）までは 2.5 km と距離はそうないのだが、つづら折の道は急且つ険しく山に分け入る感じで、昔は馬では越せず牛で越えたという。

途中、菊池寛の「恩讐の彼方に」の舞台「中の茶屋跡」や戦国時代木曾氏と武田勝頼軍の古戦場跡「葬沢」を過ぎ、喘ぎながら山頂に來ると大きな「熊除けの鈴」が吊るしてあった。そばに「熊も人間が怖いのです。この鈴で熊に知らせてやりましょう」との立て札があり、思い切り鈴を鳴らした。熊に届いたのであろうか、幸い熊に出くわさなかった。

しばらく細い道を下ると小さな「丸山公園」に出た。当時の休息地・見晴地だったようで、夥しい石碑群に混じって芭蕉の句碑もある。更

に下るともう一つ熊除けの鈴があったので勢いよく鳴らして急坂を下りきり、ようやく「**蓼原宿**」に到着した。

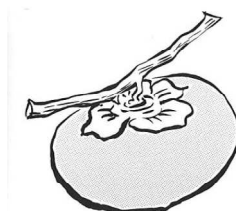
木曾川は近くに源流があり、ここが分水嶺。木曾路はここから木曾川と共に南（太平洋側）に続く。蓼原宿は名物の「お六櫛」とよばれる木櫛を生産し、櫛の大看板がある旧家が資料館になっていた。また水が良いためか地酒「木曾路」の蔵元がある。

巴御前ゆかりの紅葉の名所「巴ヶ淵」に出た。伝説ではここに住む竜神が中原兼遠の娘の化身巴御前になったという。

次のひっそりと静まり返った「**宮ノ越宿**」は「木曾義仲」の故郷であり、平家追討の「旗挙げ八幡宮」、戦勝祈願の「南宮神社」、菩提寺の「徳音寺」等の史跡が多い。徳音寺の近くに最近「義仲館」が完成。彼ゆかりの品が展示されていた。義仲はこの地の豪族中原兼遠にここで養育され成長した。この養父兼遠の菩提寺が宿はずれの「林昌禅寺」で、境内の中腹に彼の墓所があったので寄り道した。

宮ノ越宿を抜ければやがて「中山道東西中間之地」標柱に至り、ようやく半分（268 km）来たことを実感した。木曾駒ヶ岳や中央アルプスを左に見ながら進み、次の木曾福島 of 巨大な冠木門をくぐると「**福島宿**」の関所跡。その隣が関所番を勤めた高瀬家の屋敷。藤村の姉で「夜明け前」の“お糸”の嫁ぎ先であった。

この宿は山と山が木曾川に迫った天然の要害で、絶好の検問地だった。



行事予定

2008年2月までの予定

	12月	1月	2月
学習会	—	—	2月16日(土) 12:30 特別公開講座 能見台地区センター
寺社を巡る会	12月6日(木) 集合：10:00 六浦駅 テーマ：六浦地区(Ⅱ) 行動：千光寺～宝樹院～ 長生寺～上行寺他	1月12日(土) または13日(日) 集合：10:00 場所未定 テーマ：仏像の観かた 行動：座学主体の予定	2月7日(木) 集合：10:00 十二所バス停 テーマ：鎌倉三十三観音(Ⅰ) 行動：光触寺～浄妙寺～杉 本寺～荏柄天神社他
古文書を読む会	12月13日(木) 金沢公会堂 小田原北条氏五代の書状 12月27日(木) 金沢公会堂 江戸城内襲撃殺人書付 (板倉修理切腹事件)	1月10日(木) 金沢公会堂 明治期の四季の挨拶文 1月24日(木) 金沢公会堂 江戸城内襲撃殺人書付 (板倉修理切腹事件)	2月14日(木) 金沢公会堂 明治期の四季の挨拶文 2月28日(木) 金沢公会堂 江戸城内襲撃殺人書付 (板倉修理切腹事件) 最終
ふれあいの道歩こう会	12月20日(木) 群馬⑬山菜のみち ⑭道祖神のみち (雨天時12月21日(金))	1月17日(木) 千葉⑪森と森をつなぐみち ⑫観音様のみち (雨天時1月18日(金)) 1月11日(金) 総会	2月21日(木) 千葉⑨昭和の森をたずね みち (雨天時2月22日(金))
懐かしの映画を観る会	12月10日(月) 怒りの葡萄 (米) 12月24日(月) にごりえ (文学座)	1月14日(月) 逢いびき (英) ニューシネマ・パラダイス (伊) 1月28日(月) 天国と地獄 (東宝)	2月11日(月) 情婦 (米) 2月25日(月) 雪国 (東宝)
浮雲俳句会	12月23日(日) 9:30 金沢地区センター テーマ：歳晩の街を詠む (節季の街に年を惜しむ)	1月27日(日) 9:30 金沢地区センター テーマ：猫を詠む (身近な猫の生態を詠む)	2月24日(日) 9:30 金沢地区センター テーマ：梅を詠む (早春の梅を愛でる)

連絡先：学習会 771-4393(岡本)

古文書を読む会 784-3420(岡田)

懐かしの映画を観る会 701-1606(佐藤)

寺社を巡る会 772-5610(内田)

ふれあいの道歩こう会 783-4539(宮原)

浮雲俳句会 774-3878(北野)

訃報

会員の関原正夫氏が4月にご逝去されました。謹んでご冥福をお祈り致します。

編集後記 ・地球温暖化といわれて久しい。今夏の暑さはこのまま続くのではないかと不安を感じさせる程だった。例年の冷涼な朝晩を迎えてほっとしている。木の葉も色づき絶好の歩く季節。10月の探訪は如何でしたか。何の変哲も無い道ながらそれぞれに歴史を刻んでいる。皆様のお陰で会報23号を無事お届けできることを感謝します。ふと気がついたら会報が20年30年の歴史を刻んでいるよう、さらにご協力をお願いします。(I.A)	発行日	平成19(2007)年11月10日
	発行周期	4回/年(2、5、8、11月)
	発行者	金沢区生涯学習“わ”の会
	編集責任者	小岩克介